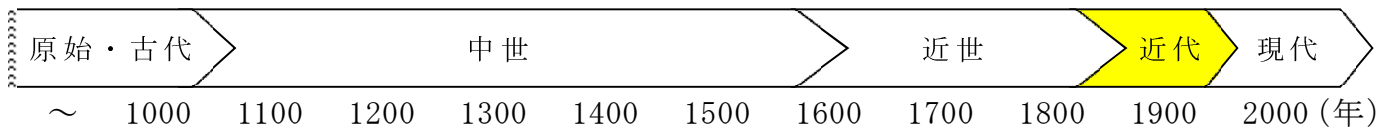


2 富国強兵とひろしま～軍港 呉～



1 呉港とはどのような港でしょうか？

呉は、現在、造船の盛んな地として知られ、呉港周辺には造船関連の会社が多くあります。また、呉には海上自衛隊呉地方隊が置かれ、港内では護衛艦や潜水艦などを見ることもできます。さらに、呉港は広島港や松山港（愛媛県）、江田島市の各港を結ぶ港としても大切な役割を果たしています。



現在の呉港の様子

呉は、明治の初めまでは静かな漁村でしたが、1886（明治19）年、海軍鎮守府⁽¹⁾を呉港に置くことが決定されたことから、軍港としての発展が始まり、呉のまちは大きく変化します。

呉で建造された船の中で、最も有名なのが戦艦「大和」です。当時、世界最大といわれた「大和」は、1937（昭和12）年、海軍の威信をかけて、当時の最先端の技術が惜しみなく投入され完成しました。



戦艦「大和」
（大和ミュージアム提供）



なぜ、呉港は海軍の港となったのでしょうか？また、呉港は軍港としてどのような役割を担い、後の呉にどのような影響を与えたのでしょうか？

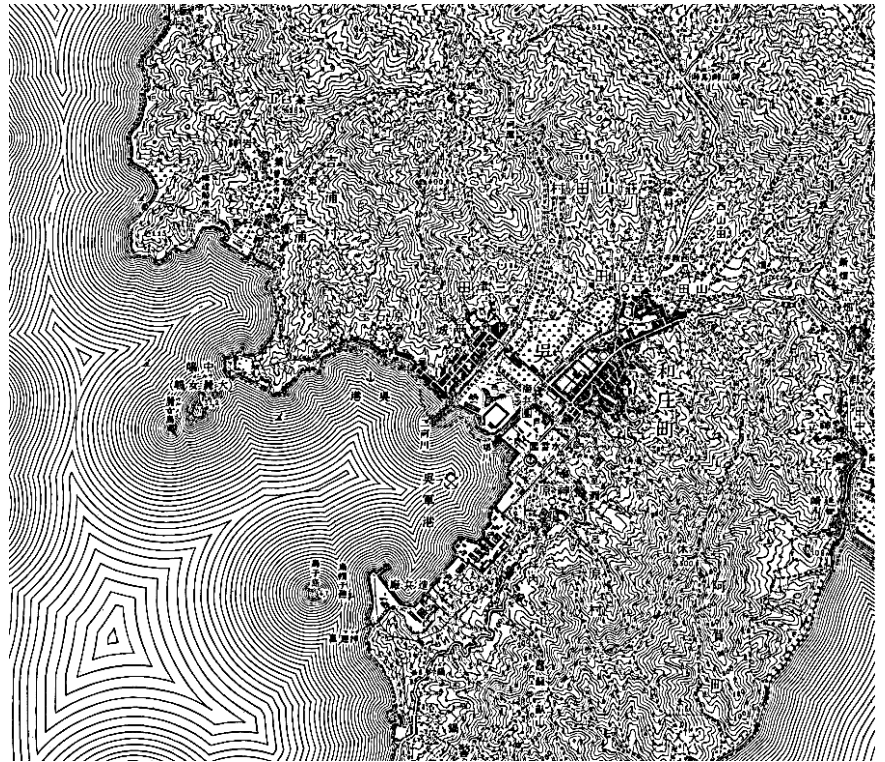
2 なぜ、呉港は海軍の軍港となったのでしょうか？

明治政府は、「富国強兵」をスローガンに、欧米諸国に対抗するため、産業や軍備の近代化を進めました。1886（明治19）年には、海軍条例が公布され、全国を五つの海軍区に分け、それぞれに鎮守府が設置されることになりました。その中の第二海軍区の鎮守府を呉に設置することが決定されたのです。

なぜ、呉に鎮守府が設置されたのでしょうか。鎮守府の候補地を調査した海軍の肝付兼行少佐は、呉が、湾の周囲を山と島に囲まれ、背後に丘陵を持ち、

敵の攻撃を防ぐ上で絶好の地であるということ、呉湾周辺は大型船にちょうど良い水面の広さや海の深さがあるということから、鎮守府設置には「此呉湾ヲ除キテ他ニナシ」と報告しています。

こうして呉港は海軍の鎮守府が置かれた軍港となったのです。1889（明治22）年、膨大な国家予算をかけて呉鎮守府は開庁し、その後も巨額の資金の投入により、造船や兵器製造の施設が拡充され、呉港一帯は大きな変革を遂げることになりました。



1899（明治32）年当時の呉市の地図
（大日本帝国陸地測量図作成 五万分一地形図「呉」図幅）

3 呉港はどのような役割を担ったのでしょうか？

1903（明治36）年、鎮守府内に設置されていた造船部門と兵器製造部門が統合され、呉海軍工廠（海軍直営の兵器製造工場）となりました。当時の呉海軍工廠は、造船部、造兵部、製鋼部、造機部、会計部などからなり、約1万3000人の工員がいました。その後、日露戦争後の1907（明治40）年には職工が約2万4000人になり、東洋一の大工場に成長しました。造船所、兵器製造所、製鋼所などを同じ場所に置くことにより、短期間で次々と世界的に優秀な艦艇を建造することができるようになり、日本一の軍港として発展していくのです。

1921（大正10）年には、当時の賀茂郡広村（現在は呉市）に呉海軍工廠広支廠が設置され、1923（大正12）年には

年	呉のおもなできごと	日本のおもなできごと
1886（明治19）	第二海軍区鎮守府の位置を呉港に設定	
1889（明治22）	呉鎮守府開庁	大日本帝国憲法発布
1894（明治27）		日清戦争
1895（明治28）	仮設呉兵器製造所設立	
1896（明治29）	船渠（ドッグ）工場開設	
1901（明治34）		八幡製鉄所操業開始
1903（明治36）	造船部門・兵器製造部門を呉海軍工廠に統一	
1904（明治37）	製鋼部門を増設	日露戦争
1914（大正3）		第一次世界大戦参戦
1921（大正10）	呉海軍工廠広支廠開庁	
1937（昭和12）		日中戦争
1940（昭和15）	戦艦「大和」進水式	
1941（昭和16）		太平洋戦争
1945（昭和20）	呉空襲 呉海軍工廠廃止	終戦

軍港としての呉港の年表

広海軍工廠となり、航空機の製造や修理を行うようになりました。

こうして、呉港の一带は海軍施設が集中し、戦艦や航空機の製造に必要な技術が発展し、製造に必要な工具などを作る技術も併せて発展しました。呉港では、当時の最先端の技術とそれを扱う職人が集まり、太平洋戦争終結までに、戦艦「長門」や航空母艦「赤城」、世界最大の戦艦として知られる「大和」などが造り出され、終戦までの約 60 年間大いに発展しました。

4 呉港が軍港となったことで、呉のまちはどのように変わったのでしょうか？

呉港が軍港となり、巨大軍需工場が立地したことにより、呉のまちは大きく変化しました。

呉鎮守府開庁前の 1887（明治 20）年に約 1 万 5000 人であった人口は、呉が市となった 1902（明治 35）年には 6 万人、1910（明治 43）年には 10 万人を超えています。その後も人口は増え続け、1931（昭和 6）年には、20 万人、1941（昭和 16）年には、30 万人を超えています。また、第二次世界大戦中の 1943（昭和 18）年には呉市の人口は 40 万人を超えていました。

呉市両城には、今も急傾斜の斜面に、10m 程もある石垣を積み上げて雛壇状にした宅地があります。呉は、背後を山に囲まれたすり鉢状の地形であるため、新たに移住してきた軍関係者や工廠の職工等の住宅は、平地ではなく周囲の急傾斜地を利用して建てられました。

今はもう廃止になっていますが、1909（明治 42）年、広島県内初の市内電車も呉に開通しました。中心市街地には喫茶店や映画館、洋装店などが立ち並び、特に艦船が入港した時には大変にぎわいました。

しかし、1945（昭和 20）年、呉空襲によって、中心市街地は大きな被害を受け、そして日本の敗戦により広大な旧軍用地や市街地の多くを進駐軍⁽²⁾に取り上げられたため、呉の人口は約 15 万 2000 人にまで激減しました。

年	人口（人）
1887（明治 20）年	15,158
1902（明治 35）年	60,124
1910（明治 43）年	102,264
1916（大正 5）年	135,351
1921（大正 10）年	142,111
1926（昭和 元）年	146,800
1931（昭和 6）年	210,472
1935（昭和 10）年	231,333
1941（昭和 16）年	300,077
1943（昭和 18）年	404,257
1945（昭和 20）年	152,184

呉市の人口の推移
（呉市統計書）



呉市両城の住宅の様子

5 軍港となったことは、その後の呉にどのような影響を与えたのでしょうか？

終戦とともに、軍港としての役割を終えた呉ですが、1950（昭和 25）年に、平和産業港湾都市への転換を目指す「旧軍港市転換法」⁽³⁾が制定され、呉にあった海軍の土地や建物を民間で利用できるようになりました。旧海軍施設への積極的な企業誘致が行われ、造船、鉄鋼などの企業が相次いで進出しました。



現在の呉の造船所の様子

戦時中、呉にあった日

本の最先端の設備や技術はこうして民間に引き継がれ、鉄鋼業や造船業はその後の呉市の基幹産業として発展します。戦後わずか7年後の1952（昭和 27）年には、「大和」を生んだドッグで、当時世界最大級のタンカーである「ペトロ・クレ」（38,000 重量トン）が進水しました。その後も次々世界最大級のタンカーが建造され、呉は「造船王国」と言われた日本を支えることになるのです。

旧海軍の施設や技術が引き継がれたのは、造船業や鉄鋼業だけではありませんでした。戦後、呉では紙パルプやタービン、ジェットエンジン用部品など数多くの製品が造り出されました。また、地場産業である酒造業、やすりの製造なども着実に業績をあげるようになりました。

1951（昭和 26）年、呉港は海上輸送網の拠点となる重要港湾^{こうわん}として国の指定を受け、翌1952（昭和 27）年には、呉市が港湾管理者となり、港の運営体制が確立され諸施設の復旧整備が進み、呉港は貿易港として生まれ変わりました。

今日の呉港は、鉄鋼、造船、機械などの工場群を背景として金属機械工業品を取り扱う港として、また、海上交通の要地として重要な役割を果たしています。



呉港が軍港となった理由やそのことによる変化、後の呉への影響について、調べたことや考えたことをもとに自分の言葉でまとめてみましょう！

【注】

- (1) 日本の海岸と近海の防衛を目的として設置された旧帝国海軍の官庁。
- (2) 第二次世界大戦後、日本を占領した連合国の軍隊。
- (3) 旧軍港市（横須賀市、呉市、佐世保市及び舞鶴市）を平和産業港湾都市に転換することにより、平和日本実現の理想達成に寄与することを目的として制定された法律。

【もっと調べてみよう!郷土の歴史】

- 呉市（港）や大和ミュージアム（呉市海事歴史科学館）に出かけて調べてみよう！
 - ・港の周りの海や山の位置，呉の地形，住宅のある場所などはどうなっているでしょうか。
 - ・造船に必要な技術はどのようなものでしょうか。それは現在どう生かされているのでしょうか。
- 呉市にあった市内電車のことを地域の人から聞きとってみよう！
- 富国強兵政策と広島との関係についても調べてみよう！
 - ・江田島海軍兵学校は，いつ頃できて，どのような役割を果たしたのでしょうか。
 - ・なぜ，広島に紡績所が建設されたのでしょうか。

◇入船山いりふねやま記念館

住所：呉市幸町 4-6 TEL：0823-21-1037 **HP**

※郷土館，歴史民俗資料館等があり，呉の歴史をたどることができます。

◇大和ミュージアム（呉市海事歴史科学館）

住所：呉市宝町 5-20 TEL：0823-25-3017 **HP**

※明治以降を中心とした呉の歴史と造船，製鋼を始めとした各種の「科学技術」を，先人の努力や当時の生活・文化に触れながら紹介しています。

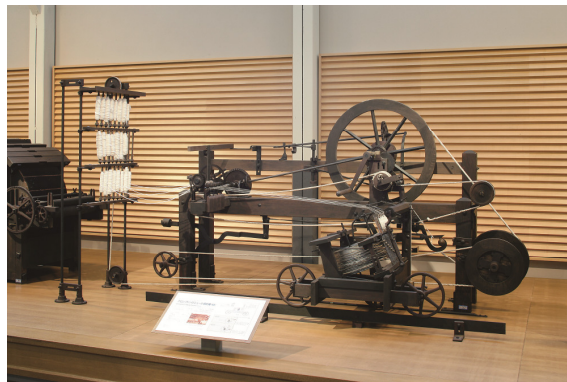
【もっと知りたい!郷土の歴史】

官営かんえい広島綿糸紡績めんしぼうせき会社

明治政府は，富国強兵政策を進めるため，産業の近代化に力を入れました（殖産興業）。開国以降，海外の安い綿織物が輸入されるようになり，国内の木綿産業を圧迫するようになりました。

そこで，明治政府は，木綿産業の振興を図るため，江戸時代から綿作と木綿産業が盛んであった広島と愛知に洋式紡績の模範工場もはんを建設することを決定しました。紡績工場は輸入された綿花から木綿の糸を生産する工場です。その工場で使用されたイギリス製紡績機は水力を動力とするものであったため，広島の工場は瀬野川上流の上瀬野川村荒谷（現広島市安芸区上瀬野町）に建設されることになり，1882（明治15）年に完成しました。

しかし，完成寸前に広島県県令の出願により，失業士族に職を与えるため，旧広島藩の下級士族で組織した広島綿糸紡績会社に払い下げられ，官立模範工場としての役割を果たすことはありませんでした。しかし，工場の建設は日本の紡績業の発展の先がけとなりました。



イギリス製ミュール紡績機
（トヨタテクノミュージアム産業技術記念館提供）

呉に集まる様々な産業（やすりと製砥業）

呉が軍港となったことで製鋼や造船そのものにかかわる技術とともに、鉄を磨いたりつないだりといった技術や、軍人や職人に必要な身の回り品を扱う工場や商店も呉に集まるようになります。

呉市仁方のやすりは、江戸時代の末期に仁方の一町民が、大阪から製法技術を習得し伝えたのが、起源と言われています。当時は、現在のようないかなめく設備はなく経験と勘による手工業的生産方法によっていました。

1908（明治41）年頃に目立機が考案され目立作業の開発がされたことにより、農業や鍛冶業と一緒に行われていたやすり生産が独立の産業となっていきました。

1917（大正6）年には、電力による動力化が行われ、その後、やすりの形状や大きさを設定できる圧延技術が導入されたことで、一日一人で200本の目立てができるほど生産量が飛躍的に伸びました。

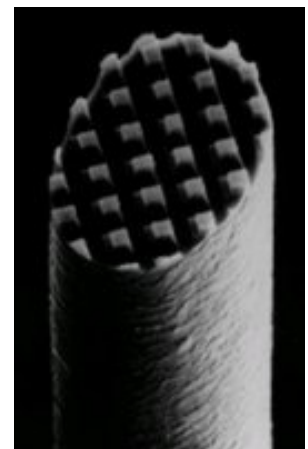
仁方のやすりの生産をみると、1936（昭和11）年から1940（昭和15）年にかけて著しく伸びています。工場数も明治末期から大正初期にかけては10程度であったものが、1936（昭和11）年には30になり、生産額は全国の50%を占めるほどになりました。これは、呉海軍工廠などの「指定工場」になったことが大きな要因でした。このことによって、戦艦や航空機などの製造に必要な鉄工やすりの需要が拡大し、やすりを製造する技術の発展にもつながるのです。やすりを扱う職人も全国から集められました。

現在、仁方では、戦前からの加工・製作機械の考案や技術革新により、高品質のやすりが大量にできるようになり、年間1100万本が生産され、全国の生産シェアの95%を占めています。生産されたやすりは、全国の機械、金属、木工、美術工芸関連の事業所等で使用されています。

また、鉄鋼を切る・削るといった加工工程では研削用の砥石が使用されます。そこで、呉では製砥業も発展します。当時の金属を切る、削る、磨くといった技術は、現在のミクロン単位での研削切断装置の製造や半導体・電子部品などの精密加工装置の製造へと発展し、それは世界のトップレベルの技術となっています。



仁方で生産されたやすり
（鉦協同組合広島県連合会提供）



髪の毛の断面を22分割
（ディスコ(株)提供）